

優秀賞

十日間の父子手帳

帝塚山大学 文学部 3年 牧野 由来

大学二回生の春休み、ほこりが溜まった一冊のノートを見つけた。実家で大掃除をしていた時だった。開いてみると、生後十日間までの私の写真が貼られていた。またその下にははねの強い字で、「今日はミルクをよく飲んだ。」などと書かれていた。この特徴のある字は父の字だ。

父は写真を撮ることが好きだ。しかし、パソコンでアルバムを作るため、わざわざ印刷することは珍しい。不思議に思った私は、夜に父を尋ねた。すると、少し戸惑いながら、懐かしみながら話してくれた。ノートを作ったのは、私のためでも母のためでもあったそうだ。

生まれた時、私には問題があり大きな病院に搬送された。母が私を初めて抱くことができたのは十日後のことだったという。その間、母は我が子に会えない寂しさと不安で毎日泣いていた。そんな姿を見た父は、「自分が子どもの様子を伝えれば、少しでも安心するのではないか。」「母と離れても一人で必死に生きていく子どもを残したい。」と考えた。そして、私の入院している病院に片道一時間かけて毎日通い、写真を撮り、ノートに記録して母に見せたのだ。

私は、そのような状態で生まれたことを両親は恥ずかしく感じているのだと思っていた。生まれた時のことは幼い頃に少し教えられたが詳しい説明はなかったからだ。しかし、このノートを見てそうではないことが分かった。私がショックを受けないように、一種の愛情として話さずにいたのだろう。母が私を抱いたのが十日後だったこと、父が毎日病院に通っていたことは初めて知った。

後日改めてノートを見返すと、最後のページに、「焦らなくていい。ゆきらしく生きてほしい。」

と書かれていた。今も、できないことに苦しむ日々がある。そんな時は開こう。父の愛と願いが詰まった、この十日間の父子手帳を。